辞典を繙く　その1　国語辞典

2007.05.30～2008.05.07更新

萩原　義雄

小学館『日本国語大辞典』初版
小学館『日本国語大辞典』第二版
『日本国語大辞典』オンライン版
http://nikkoku.japanknowledge.com/beta.html　参照。

寺子屋こぼれ話し　―（八〇〇字例文）―

感染症の恐怖

この春〔二〇〇三年〕中国で発生した。死亡率の高い新型肺炎〔SARS〕の感染拡大は、なかなか歯止めがかからず、世界中が危機感を持って対応に苦慮しています。収容先の病院にいる人がまず感染してしまうため、医者が逃げ腰になっているとか。医薬品の開発・医療技術の進歩により、難病をこの世から追放しつつあると思っていたら、どっこい新型の悪魔が反撃してきたらしい。

かわら版の時代は、麻疹・疱瘡・コレラなど、流行のたびに大量の死者を出し、神仏やまじないに頼るしか方法がなくて恐怖の日々を過ごしていました。病原の菌もウイルスも知られていない時代のことですから、まじないや厄除けの風習にすがってひたすら病魔の退散を待つしかなかったのでしょう。文久二壬戌年七月の上方より江戸近国、かわら版番付「麻疹能毒養生弁（はしかのうどくようじょうべん）」の中央に見える木の葉は、麻疹へのまじないで、「みささ木の葉に『麦どのは生れながらにしてはしかして、さてそのあとはわが身なりけり』と書き、わが家の軒に吊るべし」と示しています（麦の穂の芒（のぎ）をはしかという）。また、疱瘡を除けるには赤い色で防ぐとされ、肌着も上着も赤色にしたうえ赤頭巾をかぶり、赤い蚊帳に入る、さらに神仏に達磨を供えて平癒を祈るという徹底ぶりでした（社寺の達磨市の起源と云われる）。安政五年八月のコレラ流行時には、奉行所から村々に対し、神社で祈禱をせよとの御沙汰が出ています（神奈川県史）。

新型肺炎の侵攻を阻止すべく、完全武装で検疫にあたる姿をテレビで見ますと、SF（空想）の世界が今まさに現実になってきたように感じます。我が身だけの安全を願う呪いは、もはや通じません。地球人類が団結して新型悪魔を撃滅しなければならないと考えます。

『日本国語大辞典』第二版引用語彙

かわらばん〔かはら：〕【瓦版】〔名〕名かためた粘土に文字や絵をほりこんで焼き、これを原版として用いた印刷。また、その印刷物。江戸時代、種々の事件を木版で印刷し、市中を売り歩いた一枚刷りの出版物。心中、仇討ち、刑死、火事などの新奇な事件を街頭で読み売りした。読み売り。＊評判記・嗚久者評判記〔一八六五〕「とにも角にも瓦板の中興、イヨおやだまア」【語誌】についてその名称の由来は、瓦に文字を彫って印刷したから、あるいは、それを思わせるほどに粗末な木版印刷だったからなどの説があるが、確証はない。当初は「えぞうし（絵草紙・絵双紙）」、「よみうり（読売）」などと呼ばれていたが、「かわらばん」という呼称は幕末になってようやく文献に現われはじめる。現存する古いものは、慶長二〇年（一六一五）大坂夏の陣の際に発行された「大坂安部之合戦之図」と「大坂卯年図」であるといわれる。【発音】ラ

はしか【麻疹・痲疹】〔名〕ウイルスによる全身性伝染病。二～五歳の幼児に多く、春秋に流行し、罹患すると終生免疫を得る。潜伏期は一一日間前後。最初発熱、咳(せき)、鼻汁、目やに、上気道炎を示し、口腔粘膜に発疹を生じる。次いで全身的に小さい紅斑が現われ、融合して拡大する。ふつう一〇日位で全快するが余病を併発することも少なくない。ましん。＊醍醐寺文書-(年月日未詳)六九九)「自一昨夜以外違例仕候。はしかの序にて候歟」＊経覚私要鈔-康正三年〔一四五七〕六月二日「殿中はしか於于今大都平＝、目出」＊文明本節用集〔室町中〕「赤瘢　ハシカ　或作、隠疹(ハシカ)」＊多聞院日記-文明一六年〔一四八四〕六月三日「自今春疱瘡并瘢(ハシカ)以外増、七・八十歳之物に至まで病之」＊仮名草子・浮世物語〔一六六五頃〕一・二「思ひの外に疱(いも)・疹(ハシカ)かろがろといたしけり」＊滑稽本・麻疹戯言〔一八〇三〕送麻疹神表「貨食者(にうりや)麪家(そばや)も麻疹(ハシカ)に付経商休(しゃうばいやすみ)招状(はりふだ)を出し」＊自然と人生〔一九〇〇〕〈徳富蘆花〉写生帖・雨後の月「生憎従姉従妹は痲疹(ハシカ)して」【方言】やけど。はしか富山県射水郡394【語源説】喉にハシカ(芒)が立ったような感のあるところから〔大言海〕。ハシカ(芒)の転義〔俚言集覧・和訓栞〕。瘡頭が赤いところから、ハシ-アカ(赤)の義〔俗語考・古今要覧稿〕。ハシカサ(端瘡)の義〔名言通〕。マシンカサ(麻疹瘡)の義〔言元梯〕。【発音】ハジカ〔飛・・大分〕カハ【辞書】文明・易林・日葡・書言・ヘボン・言海【表記】麻疹○書○〈赤瘢・隠疹○文瘡疹○易麻疹○言。〔項目〕はしかは命定め疱瘡はみめ〔器量〕定め

ましん【麻疹・痲疹】〔名〕「はしか(麻疹)」に同じ。＊病名彙解〔一六八六〕五「麻疹(マシン)俗に云はしか也」＊音訓新聞字引〔一八七六〕〈萩原乙〉「麻疹　マシン　ハシカ」＊万氏家伝痘疹心法-痲疹「痲疹之証、面必紅、咳嗽嚏噴、鼻流膿、眼涙汪々如哭」【方言】じんましん。ましん島根県大原郡725【発音】マ／【辞書】ヘボン・言海【表記】麻疹○〈○言

ほうそう〔ハウサウ〕【疱瘡】〔名〕天然痘の別称。また、種痘やその痕をさしてもいう。疱痘。＊台記-康治二年〔一一四三〕五月七日「新院御疱瘡、令蔵人経憲申不審之由」＊日遺文-報恩抄〔一二七六〕「国にはうさうおこり、兵乱つづきしがごとし」＊浮世草子・世間胸算用〔一六九二〕三・四「娘の子持ては、疱瘡(ホウソウ)して後形を見極め」＊花秘訣〔一八二〇〕牛痘の能力「牛痘も〈略〉実に疱瘡を免るるの神功を具有するものなり」【語誌】古代においては、発症の原因を、穢れに触れて生じる、つまり外感の症としたが、中世になると「医説」などの宋の医学書の影響で胎毒説をとるようになる。民間では「疱瘡神(ほうそうのかみ・ほうそうがみ)」という疫神によって発病すると信じられていた。【方言】あばた。ぶつぶつ。ほうそう広島県比婆郡774ぼうぞ香川県三豊郡・粟島829ぼうど香川県木田郡829ぼうぞくた香川県三豊郡・小豆島829ほうそうづら〔一面〕熊本県天草郡936粒がそろって入っていない玉蜀黍(とうもろこし)。ほうそう群馬県多野郡246【発音】ホーソーハーソー〔鳥取〕ホーソ〔埼玉方言・伊賀・鳥取・伊予〕ホソ〔鹿児島〕ホソウ〔岐阜〕ホ〈1〉【辞書】色葉・易林・日葡・書言・ヘボン・言海【表記】疱瘡○易○書○〈○言皰瘡○色○書。〔子見出し〕ほうそうの神(かみ)ほうそうの見目定め(みめさだ)麻疹(はしか)の命定め(いのちさだ)ほうそうの山(やま)を上(あ)げる

ほうそ〔ハウ：〕【疱瘡】〔名〕「ほうそう(疱瘡)」の変化した語。＊かた言〔一六五〇〕四「疱瘡をはうそ」＊雑俳・花笠〔一七〇五〕「たまったる・ほうそのの跡のみっちゃくちゃ」

いもがさ【疱瘡】〔名〕天然痘の古名。また、そのあと。あばた。もがさ。いも。いもい。いもがお。＊伊呂波字類抄〔倉〕「皰瘡　イモカサ　モカサ」＊書言字考節用集〔一七一七〕五「痘瘡　イモガサ」＊随筆・玉勝間〔一七九五～一八一二〕四〇「今の世にも、はうさうといふ、又いもといふ、されば昔もがさといへるは、いもがさの省きか」【語源説】オモガサ(面瘡)の転〔大言海〕。イモは忌の転語。不浄を忌むから〔菊池俗言考〕。イ-モガサ(喪瘡)または忌瘡か〔日本語源賀茂百樹〕。【発音】イモサモ【辞書】色葉・書言・言海【表記】皰瘡○色痘瘡○書

いもい【疱瘡】〔名〕「いもがさ(疱瘡)」に同じ。＊日葡辞書〔一六〇三〜〇四〕「Imoi(イモイ)」【辞書】日葡

いも【疱瘡・痘痕】〔名〕「いもがさ(疱瘡)」の略。＊運歩色葉〔一五四八〕「疱瘡　イモ」＊日葡辞書〔一六〇三〜〇四〕「Imo(イモ)〈訳〉比喩として、痘瘡」＊俳諧・西鶴大矢数〔一六八一〕第一五「いももはしかも時雨晴行酒まぜて湯尾峠も爰なれや」＊雑俳・柳多留-五〔一七七〇〕「ちっとべいいもはあるがと村仲人」＊門三味線〔一八九五〕〈斎藤緑雨〉二「過日(こないだ)も路に八百屋の荷が顛覆(ひっくりかへ)りて、そこらがお師匠様の面(かほ)よと言ひなさるを何かと思へば、痘痕(イモ)だらけと悪い事ばっかり」【発音】モ【辞書】日葡・ヘボン・言海【表記】痘瘢〇〈　[子見出し]いもの神(かみ)

コレラ〔名〕(蘭・英cholera獨Cholera「古列亜」「虎列刺」「虎列拉」「虎烈刺」「虎狼痢」「酷烈辣」などと当てた)感染症法での二類感染症の一つ。コレラ菌の感染による。菌が水や飲食物とともに口から侵入して発病する。嘔吐と激しい下痢を繰り返し、水分が失われて衰弱をきたし、呼吸困難になる。皮膚がたるんでしわだらけのコレラ患者特有の顔となり、筋肉のけいれんを起こし、発病後一、二日で死亡することもある。コロリ。コロ。コレラ病。《季・夏》＊医語類聚〔一八七二〕〈奥山虎章〉「Cholera虎烈刺」＊当世書生気質〔一八八五〜八六〕〈坪内逍遙〉一七「ヱ。虎(コ)レラだって。真実か」＊福翁自伝〔一八九九〕〈福沢諭吉〉大阪を去りて江戸へ行く「虎列拉(コレラ)の真盛(まっさかり)で〈略〉バタバタ死にました」＊何処へ〔一九〇八〕〈正宗白鳥〉六「女は虎列刺(コレラ)か何かで死んぢまったとしとけば」＊冬を越す蕾〔一九三四〕〈宮本百合子〉「饑饉が終わるとコレラが蔓延し」【発音】コ〇レ【辞書】言海【表記】虎列刺〇言

まじない[…なひ]【呪】〔名〕(動詞「まじなう(呪)」の連用形の名詞化)①神仏や神秘的なものの威力を借りて、災いや病気を取り除いたり、他人に災いを与えたりすること。また、その術。禁厭(きんよう)。符呪(ふじゅ)。まじないごと。＊源氏〔一〇〇一〜一四頃〕若紫「わらはやみにわづらひ給てよろづにまじなひ、加持など参らせ給へど」＊仮名草子・浮世物語〔一六六五頃〕一・二「此歌を書きて床に置けば、夜啼の止まる厭魅(マジナヒ)也と言ふ人有ければ」＊風俗画報-一五八号〔一八九八〕人事門「浪華の節分〈略〉当夜種々なる呪咀(マジナイ)を為すことあり」②ごまかすこと。うわべをうまくとりつくろうこと。また、相手の機嫌を巧みにとること。まじくない。＊雑俳・折句大全〔一八〇三〕「まじないの利く婆嫁を可愛がる」【発音】マシネ〔大隅〕マジネー〔埼玉方言〕マズナイ・マゼナイ〔鳥取〕　ナ平安【辞書】日葡・書言・ヘボン・言海【表記】禁厭・禁呪・厭当・越方〇書咒〇ヘ呪〇言

やくよけ【厄除】〔名〕厄難をよけること。厄年の災厄を払いのけること。また、その方法。やくはらい。やくおとし。＊雑俳・柳多留-二二〔一七八八〕「やくよけ〈行ふり袖はうれ残り」＊江戸名所図会〔一八三四〜三六〕四「宗祖日蓮大士の霊像は、世に除厄(ヤクヨケ)の御影と称す」＊雲のゆき来〔一九六五〕〈中村真一郎〉九「この小さな御像はやがて江戸へ行って、〈略〉後世の人々に厄除けの霊験を垂れたもうているわけである」【発音】ケヨ【辞書】書言【表記】厄除〇書

みささぎ〔名〕名鳥「みさご(鶚)」の別名。＊物類称呼〔一七七五〕二「雎鳩　みさご　播州にて、みささぎ」【方言】みささぎ播州†020みささたえ広島市004

だるま【達磨】〔名〕(梵dharma)の音訳。「法」と意訳　①仏語。規範・真理・法則・性質教説・事物などの意。＊性霊集-六〔八三五頃〕藤大使為亡児設斎願文「達磨の妙宝を筏とし」＊正法眼蔵〔一二三一〜五三〕帰依三宝「法は西天には達磨と称す、また曇無と称す」②[redacted]坐像にまねて作り、普通、顔面以外を赤く塗った張り子。底を重くして倒してもすぐ起きるように作る。商売繁盛・開運出世の縁起物で、最初片目だけを入れておき、

願いごとがかなった際もう一つの目を入れて両眼をあけるならわしがある。＊談義本・風流志道軒伝〔一七六三〕二「掛乞は皮財布を膝に敷きて、達磨(ダルマ)のやうな目をむき出し」＊歌舞伎・お染久松色読販〔一八一三〕大切「大き成る達磨と茶袋を一つにさげ」＊当世書生気質〔一八八五～八六〕〈坪内逍遙〉一一「一山二銭の物(おもちゃ)店には、さとり顔の達磨(ダルマ)」③②に似た、まるい形のもの。④売春婦。すぐにころぶところからいう。達磨女。＊雑俳・柳多留-二四〔一七九一〕「兄弟か居ぬとだるまも無一物」＊歌舞伎・綴合於伝仮名書(高橋お伝)〔一八七九〕序幕「いえなに、鳶(とんび)より近年はだるまが流行(はやり)でござりまする」＊田舎教師〔一九〇九〕〈田山花袋〉二「だるまでも居さうな料理店」⑤僧侶をいう。＊雑俳・住吉御田植〔一七〇〇〕「をとたかき鯉で食喰ふ達磨衆」＊洒落本・秘事真告〔一七五七頃〕高津新地の相「衣数珠ともに、内義にあづけ女郎をいぢって遊ぶを、商売のやうに心がけた、坊主(タルマ)、髭づらでづりをする」＊洒落本・うかれ草紙〔一七九七〕「二けん茶やの女ごが口へんじゃのたるまじゃのとしゃれたのも聞づらし」⑥羽織。腰から下がないのでいう。＊当年見聞づくし〔一八一九〕「古手屋中の上げもの(下かけて)順慶町の座禅豆(下とく心は)達磨がたんとある」⑦自転車で、前輪が大きく後輪が小さいもの。＊明治世相百話〔一九三六〕〈山本笑月〉秋葉の原昔話「自転車は木製鉄輪で朱塗の粗末な代物、三輪車、二輪車、そのほか達摩と称する、一輪はずっと大きく後輪は小さいこれも二輪車」⑧菓子の一種。＊塩原多助一代記〔一八八五〕〈三遊亭円朝〉一五「其外駄菓子はお市、微塵棒、達磨、狸の糞抔(など)で」⑨「ゆきだるま(雪達磨)」の略。＊雑俳・柳多留-四一〔一八〇八〕「大道〈達广の出来る寒ひ事」⑩「だるまこう(達磨膏)」の略。＊雑俳・柳多留-一一八〔一八三二〕「難痔しらずや鍛冶町の達广をば」⑪イ隠語。盗人仲間で、そら豆、大豆、豆類をいう。〔日本隠語集〔一八九二〕〕ロ花柳界で金銭のないことをいう。〔特殊語百科辞典〔一九三一〕〕ハ盗人仲間で赤毛布をいう。〔隠語輯覧〔一九一五〕〕三盗人・てきや仲間で殺人をいう。〔隠語輯覧〔一九一五〕〕＊いやな感じ〔一九六〇～六三〕〈高見順〉四・四「ダルマ(殺し)は俺は大好きだが」■中国の禅宗の始祖。菩提達磨。諡号は円覚大師。南インド香至国の王子で、六世紀のはじめ中国に渡り、嵩山の少林寺で面壁坐禅して悟りを得たという。梁の武帝との対論、没後のインド帰国など、多くの有名な伝説がある。古くは「達摩」と書いた。達磨大師。生没年不詳。【語誌】梵語音に従った「ダルマ」が本来の読み方であるが、後に漢字音によって「ダツマ」「タツバ」とも読まれた。各々の読み方が宗派と関係するかどうかは未詳であるが、「タツバ」の読み方は既に慈覚大師円仁(七九四～八六四)の読み方を伝えるという醍醐寺蔵「法華経羅尼集」などにも見られる。【方言】女性の冬のかぶり物、おこそずきん。だるま山形県中南部139「腰から下がない」の意をかけてはんてん。だるま秋田県秋田市・河辺郡130肩車。だるま長野県上伊那郡488下伊那郡492艫(とも)を高くした船。だるま愛媛県大三島848植物、ピーマン。だるま茨城県一部030植物、あおき(青木)。だるまのき〔―木〕・だるまっきとも。神奈川県三浦郡036虫、いなご(稲子)。色の赤いもの。だるま新潟県佐渡352魚、めばち(目撥)。だるま和歌山県東牟婁郡694だるましび〔―鮪〕三重県016魚、めだい(目)。だるま高知市865【発音】ダーマ〔鳥取・島根〕タルマ〔千葉〕【辞書】〈ボン・言海【表記】達磨子見出し

だるまの掛軸(かけじ)で腰(こし)がない　腰がない(意気地がない)ことをしゃれていう語。＊譬喩尽〔一七八六〕三「達磨(ダルマ)の掛軸(カケヂ)で腰(コシ)が無い」＊風流すいことば〔一八七九〕「だるまのかけじで、こしがない」

だるまの宗風(しゅうふう)

達磨が中国にもたらした宗風。禅宗をいう。

＊米沢本沙石集〔一二八三〕七・一三「洛陽に猫間の随乗坊の上人と聞へしは、度唐して径山(きんざん)の仏法を訪(とぶらひ)、達磨(ダルマ)の宗風(シウフウ)を学て」

だるまの目(め)を灰汁(あく)で洗(あら)ぅ

達磨の目は黒くて艶があり、これに磨きをかけると、いっそうはっきりするところからはっきりしたことにたとえる。＊俳諧・世話尽〔一六五六〕曳言之話「達磨(ダルマ)の眼(マナコ)をあくであらふ」

だるまいち【達磨市】〔名〕達磨を売る縁起物の市。年の初めに達磨を売る市。東日本で多く行なわれる。《季・新年》【発音】マ

ぶぎょうしょ〔ブギャウ…〕【奉行所】〔名〕①武家時代の官署。奉行の執務する役所。主君の命を奉じて事を執行する役人の詰所。＊沙汰未練書〔一四C初〕「一　賦奉行とは最初本解状上奉行所也」＊曾我物語〔南北朝頃〕一・おなじく伊東が死する事「たれ教ふるともなきに、公所をはなれず、ぶぎゃうしょにおきて、身をうたせ」②武家時代の裁判役所。＊沙汰未練書〔一四C初〕「一　継訴陳状事　〈略〉訴論人共寄合奉行所」＊武家名目抄〔一九C中か〕居処部・奉行所「大友興廃記云〈藍沢兵部丞鶴を買取条〉〈略〉是非我を狼藉者といはば奉行所へつれゆきて穿鑿を遂」③江戸時代、町奉行所の略称。御番所。＊浮世草子・西鶴諸国はなし〔一六八五〕一・一「此事奉行所（ブギャウショ）へ申上れば、御僉儀になって」＊御触書宝暦集成-宝暦一〇年〔一七六〇〕二月「町奉行え　町屋え盗賊入、其所にて召捕候節は、奉行所え可訴出事に付」【発音】ブーシ

まとめ

このように、一文を書き進めていく上で、国語辞典が有益な情報を提供していることにあなた自身が気づくことであろう。こうした辞書からの情報を縦横無尽に読み取り、これらのキーワードを連関させながら書き込んでいく作業方法を身につけていくことで、書くという立場に我が身を置いて最も重要な書くという手法を体得してみようではないか……。

《コラム》　二〇〇七年五月、関東圏でこの「痲疹」が流行し、多くの大學が全学休講となりました。「痲疹」とは、「痲」はしびれ、「疹」は熱病による発疹を指します。痲疹にかかると三日目に全身に発疹が出ますが、江戸時代では痲疹対策に、食べ物の良し悪しのほか、七十五日間の禁欲を強いられています。流行はしかのなぞなぞに、「はやるはしかとかけて、くわんめのきまらぬたわら。心ハ「をもひも有かるいもあり」というのがあります。

寺子教訓書

抑書筆之道者人間達二萬用一之根元也。無筆之輩者得二盲者之名一不レ異二木石蓄類一一生之苦老後之悔以レ何可レ喩レ之哉。此故第一従二幼少一不レ限二貴賤一手習事宣哉。於二異国一人生八歳之時初而入二小学門一本朝凡従二九歳十一歳一手跡入學世之風俗也。漸童子寺入之後者長發友達闘諍相撲腕押枕引一切悪敷遊戯随分可二相慎一也。早天朝起手水結レ髪赴手習所時者對二父母一為二告知一又帰宅之節可レ為二同事一。先向レ机摺レ墨静レ心調レ氣相弟子之交不レ働二無禮一慇懃而寺式法之趣不二相背一。稽古有二其定一之内堅可二相守一。人写二十字一者學二百字一手本之字形清書之直能々相考筆仕不レ速不レ遅。廻二鍛錬工夫一可レ習レ之也。無情者之為レ癖或居睡嵯二筆之管一高咄大笑破二障子一穢レ柱崩レ壁度々好二湯茶一立居或不レ問。語告口差出口根問陰言詞咎其外以二謀計虚言一掩二我身之悪一却而改人之非一欺二師之掟一不レ用二兄弟子之差圖一氣随我儘而已移二時刻一不稽古悪行之所為有レ心之児童省レ身可レ恐々々。惣而不レ依レ何。賣買遣貰遠慮尤也。筆墨紙無二放埒一白帋反古等迄剪割成レ費儀不レ可レ然。墨不レ翻。硯箱文庫之内無二散乱一竒麗取置往来之道筋不レ走。不レ狂。可レ為二神妙一。従二所行一成長已後之人柄相顕之間思二此恥一右所レ述之善悪常々可レ有二分別得心一事肝要也。於二筆學林一送二光陰一手跡執行令二由断一其上身持不埒而受二諸人之憎一汚二師之名一忘二親之恩一。不覚悟之輩者偏々口惜次第也。只一日片時無レ怠盡二氣根一嗜二行儀一可レ求世之誉身之徳一也。仍教訓書如レ件。

寶永二（一七〇五）暦六月中旬